

# 特別展示

## 尾高惇忠（藍香）筆「奉納額」

### 愛染堂「絵馬」・「奉納額」パネル展



尾高惇忠（藍香）筆  
「奉納額」（明治 21 年）

#### 奉納額と尾高家・渋沢家 —愛染堂と世界遺産との関わり—

平成 27 年 3 月、後に保存修理工事を控えた愛染堂（熊谷市下川上）に掲げられていた絵馬及び額を取り外し、隣接する下川上自治会館に移動した。その際、尾高惇忠が記した奉納額を確認することができた。この奉納額については以前から知られていたが、教育委員会の調査で尾高筆の現物確認は初めてとなった。

額に大きな毀損等はないものの、保管状況が思わしくなかったことから、江南文化財センターにてほこりの除去等を行った。これに併せて、額についての調査を行ったところ、額には「共進（きょうしん） 成業（せいぎょう） 唯頼（ゆいらい） 冥護（みょうご）」と示されており、藍染業を中心とした業界団体から愛染堂に奉納された額であることが判明した。そして、世界遺産「富岡製糸場」初代工場長・尾高惇忠の号（筆名）である「尾高藍香」の名が確認できた。

また、額の願主には、養蚕や藍玉の一大生産地だった現在の深谷市域の地名が見えることから、商売繁盛や業界繁栄の祈願を行っていたことが分かる。その中には、尾高の義弟である渋沢栄一の義弟の市郎や、栄一の伯父で養蚕の改良に力を尽くした渋沢宗助の名前を見ることができ、尾高・渋沢家の人々が現在の市域を越えて交流があったことを明らかにする遺産と言える。

#### 尾高惇忠（おだかあつただ・おだかじゅんちゅう）

文政 13 年（1830）～明治 34 年（1901）

尾高惇忠は文政 13 年（1830）7 月 27 日、武蔵国榛沢郡下手計村（現在の埼玉県深谷市）にて、尾高勝五郎、やへ（渋沢宗助の妹）の長男として生まれた。尾高は渋沢栄一の義兄であり、また渋沢に論語と商いを教えた恩師でもあった。通称・新五郎。号は藍香（らんこう）。弟に尾高長七郎、尾高平九郎（渋沢平九郎）、妹にのちに渋沢栄一の妻となる尾高千代がいる。明治 3 年（1870）、尾高はわが国初の官営工場である富岡製糸場の初代工場長を務め、絹産業の発展に多大な功績を残した。著作に「蚕桑長策」「藍作指要」などがある。

## 世界文化遺産「富岡製糸場」と尾高惇忠

平成 26 年 6 月 25 日、第 38 回ユネスコ世界遺産委員会にて「富岡製糸場と絹産業遺産群」を世界文化遺産に登録することが決定された。明治 5 年に創業した官営富岡製糸場は、初代工場長に尾高を迎え、飛躍的な発展の下地を作り上げた。民営化後、昭和 14 年に現在の片倉工業株式会社に合併。その後、昭和 62 年に操業を休止し、平成 17 年に同社から富岡市に寄贈された。

富岡製糸場には深谷出身の三人の人物が深く関わっている。渋沢栄一は明治政府の官営を前提とした製糸場設置を推進し、尾高惇忠は富岡にフランス式の機械製糸場を竣工して初代場長を務めた。葦塚直次郎は富岡製糸場の巨大建築建設を支える煉瓦職人を束ねた。

また、尾高惇忠の長女ゆうは富岡製糸場の工女第一号として就労。最新鋭の機械式糸繰りをフランス人から習得する伝習工女の先駆けとなったことで知られている。

## 愛染堂の保存修理事業について

平成 27 年度、市指定有形民俗文化財「愛染明王」を収蔵していた「愛染堂」の保存修理事業が開始した。

愛染堂は江戸中期頃に建造された建物で、各所に意匠をこらした構造が特徴である。可能な限りの部材を活かした保存修理が見込まれている。

仏像彫刻の美を有する本尊の「愛染明王」は、熊谷市下川上地区にて時代を越えて保存されてきた。江戸時代以降、「藍染」と「愛染」の関わりから、関東一円の多くの染物業者などが参拝し、額の奉納や修理工事が実施され、庶民信仰の文化遺産として残されている。

現在、愛染明王は隣接する下川上自治会館に安置されている。愛染堂保存修理実行委員会では、かつての愛染堂を蘇らせるために、保存修理工事の具体的方策などの検討が続けられている。



## 市指定有形民俗文化財「藍染絵馬」

愛染堂の中には複数の奉納額があり、享保 12 年 (1728) に記された地元氏子奉納になる諸願成就の額や、天明 3 年 (1783) に記された羽生領下川崎村広瀬氏奉納の面などがある。

染織関係の絵馬には、天保年間の紺屋の絵馬などの 4 枚あり、熊谷市の有形民俗文化財に指定されている。その中には、藍場にかめ 20 余が並び、7 人の男女が夫々違った作業に励んでいる絵馬がある (左図)。そこからは糸染めの手順に従い、最初の染めから、絞り、染め、絞りといった各人の仕事や服装を見ることができる。

堂内にある他の絵馬には、浸染めする人、庭先で商談する人、意匠に工夫をこらす人、屋外で引き染めをする人といった多様な職人の構図が描かれているものもあり、その多様さから、愛染明王に対する信仰の一面をうかがうことができる。

現在、藍染絵馬 (4 枚) は、熊谷市立熊谷図書館にて保管されている。

